



退官教官からのメッセージ

「古い時代とされているものほど新しい」

電子情報工学科 野村 實

歴史小説というものに興味を持ったのは、高校時代に吉川栄治作三国志を読んでからであった。たしか1年の夏休みのことであった。市立の図書館で何気なく手にして読み始めてからは、8巻を1～2日で読み終えた記憶がある。内容の面白さと登場人物の多さ(規模)に圧倒されたものであった。さらに、夏休み中に数度読み直した。その後、受験勉強に追われ、大学時代はアルバイト、民間会社に就職してからは出張の繰り返しで、たまに本拠地に戻ってくると業務が溜まっており、読書の時間がまるで取れなかった。

入社後10年ほど経って社員研修を受けることになり、読書感想文を書く必要にせまられた。まず、題材を何にしようかという段階で思い出したのが高校時代のことであった。あらためて、講談社版を購入し、読み直してみた。興味深く読んだのは学生時代と同じであるが、興味の対象はエピソードの類よりも人物そのものにと移っていた。後漢末の戦乱を生き残ったのは、人使いの旨い武将たちであった。そういう観点から感想文を書いた。その感想文は人事という分野に分類された。

管理職になり、時間的に余裕ができてからは、中国の古典をはじめ、いろいろな分野の本を読み漁った。最も興味をもてたのは歴史もの、その中でも、三国志に関する本であった。

三国志は、三国を統一した晋の時代に陳寿が著した正史であるが、それをもとに多くの講談、劇(の台本)、小説が作られた。それらを整理、編集、創作して羅貫中が三国志演義にまとめた。元末、明初の頃である。これには日本語訳がある。立間祥介訳(平凡社)、村上知行訳(教養文庫)などである。演義をもとにした日本の小説も多数あり、順不同に例

を挙げれば、秘本三国志(陳舜臣)、英雄ここにあり(柴田錬三郎)、三国志(北方謙三)、三国演義(安能務)、興亡三国志(三好徹)などである。

次いで、中国の歴史そのものに目を向けた。最も印象深い小説十八史略は中国の正史のうち史記に始まる十八史をまとめた曾先之の十八史略を小説風に仕立てたものであるが、実はほとんど手が加えられていない。陳舜臣の著で、講談社文庫で6巻からなる。日本書紀を初めとする日本の正史(六国史)と比べ、中国の正史には神話の類が格段に少ないことが特徴として挙げられる。蛇身人首だとか、人身牛首という記述はあるが、名前が列挙されるだけでエピソードらしいエピソードは記されていない。これは、中国の正史に対する考え方の表れで、ひたすら人間を追求する姿勢で一貫している。中国の歴史には魅力ある人物がひしめき合っており、架空の人物の入る隙間がないからであるともいえる。さて、正史に神話が少ないといっても、神話そのものがないわけではなくむしろ豊富に存在していた。正史に神話が少ないのは歴史の記述者が意図的に省略したからである。この神話や伝説については古い時代とされているものほど新しいという奇妙な法則がある。面白い話を載せようとしても、時代の新しいところはぎっしりと詰まっていて、たやすく挿入することができない。そこで新しい話は古い時代に持ってくる。一番古い時代の前はがら空きなので、そこへ継ぎ足せばよい。陳舜臣が小説十八史略の冒頭に挙げた正史にもない堯の頃(神話の時代)の神話伝説は象徴的であり、現代を風刺しているように思える。小説十八史略は平成になってからの作である。一読を薦めたい。歴史から学ぶことは多い。